



1937年1月生まれ  
東京大学教養学部教養学  
科卒業

1961年に外務省に入り、  
中近東アフリカ局参事官、  
在ベルリン日本国総領事、  
在ウィーン国際機関日本代  
表部大使、外務省儀典長、  
在ハンガリー大使、在ドイツ  
大使などを務め、2001年  
に退官。現在、ベルリン日  
独センター総裁。久米美  
術館館長。

1950年ボーイスカウト東京  
21団（現豊島第1団）に  
スカウトとして入団。その後  
リーダーを務める。2001年  
より豊島第1団育成会長。  
2010年より日本連盟副理  
事長兼国際コミッショナー  
（くめ・くにさだ）

## ボーイスカウト関係著名人インタビュー

# 久米 邦貞

ベルリン日独センター総裁、元駐ドイツ大使

駐ドイツ大使やハンガリー大使などを歴任してこられた久米邦貞・ベルリン日独センター総裁は、スカウト運動50周年を記念した1957年の第9回世界ジャンボリーに参加した7人のスカウトの1人でした。外交官としてその後の人生を歩むことになる、ひとつのきっかけになったのかもしれない。

——久米さんは外交官として活躍されてきました。

**久米** 1961（昭和36）年に大学を出て外務省に入り、2001年まで40年間務めました。ドイツには3回勤務したほか、モスクワや南アフリカなど10か国近くに赴任しました。ドイツ大使を最後に退官した後は、日独両政府が折半出資するベルリン日独センターの総裁を拝命しています。このセンターは両国の知的交流を促進するのが使命で、日独両国が共通の関心を有するテーマについて、年間25～30のシンポジウムを開いています。——ドイツ勤務はちょうどベルリンの壁が崩壊した頃でしょうか。

**久米** ベルリンの壁とは非常に縁がありまし

た。入省して研修生として1961年の9月にドイツに赴任しましたが、その1か月前、8月にベルリンの壁ができたのです。壁が突然崩壊したのは1989年11月でしたが、その直前の8月まで当時の西ベルリンの総領事をやっていた。東側が変化する兆候を感じていましたが、ああいう形で壁が壊れるとは誰も予想していませんでした。

——その後、大使としてもドイツで勤務されました。

**久米** 1998年から2001年までです。ドイツの首都をボンからベルリンへ移す大事業の時です。ドイツの政府機関がすべてベルリンに引っ越したのですから、それは大変です。もちろん日本大使館も引っ越しました。

——明治の初めに岩倉具視ら政府要人が米国や欧州諸国を歴訪した際に同行して『米欧回覧実記』という記録を残した久米邦武のご子孫ですね。外交官になられたのは、その影響ということはあるですか。

**久米** 邦武は曾祖父です。『米欧回覧実記』は岩波文庫に収められていますが、中に出てくる場所に私も行ってみたいようにしていました。祖父は絵描きですし、父は会社員なので、曾祖父の影響で外交官になった、というわけではありません。

——ボーイスカウトとのご縁はいつ頃からでしょうか。

**久米** 1950（昭和25）年に東京21団（現豊島第1団）が発足した時にスカウトになりました。中学2年生の時でした。大学に6年いましたが、その間はリーダーとして活動していました。外務省に入った後は、40年間ずっとご縁がなかったのですが、退官して帰国した際、古巣の豊島第1団に呼び戻され、2002年以来、育成会長をやっています。

21団が発足した当時の原動力はお母さんたちでした。どうもボーイスカウトは良さそうだからというので、母親同士が結束して子どもたちを引っ張りこんだのです。皇居前の日の丸行進なども、子どもよりもお母さんたちがユニフォームを着て一生懸命やっていたね。講和条約締結前で、ボーイスカウト以外、日の丸を掲げられなかったんだと思います。

——世界ジャンボリーに参加されたそうですね。

**久米** 1957年にスカウト運動50周年を記念した世界ジャンボリーがイギリスのパーミンガム近郊で開かれました。スカウトとして参加した7人の1人です。メンバーには、麻生元首相の弟さんもいました。

まだ戦後12年。飛行機代は今とあまり変わらない35万～36万円だったと思います。物価水準からすると大変な金額です。個人では出せませんので、団のお母さんたちがバザーをして集めてくれました。プロペラ機で、50数時間かかりました。

——学生時代にスカウトとして海外に行かれたことがその後の人生に影響しましたか。

**久米** 私にとって、まったく初めての海外経験でしたので、非常に印象に残りました。ジャンボリー閉会後はスイスとドイツでホーム

## 火にまつわる思い出

宗教関係代表者会議  
辻中 昭一

1957年、私はアメリカのニューヨーク州ロングアイランドにあったキャンプ場にリーダーとして2週間滞在しました。

キャンプファイアでは、参加者の高校生たちが自分の決心を小さな紙片に書き、つぎつぎと火の中に投げ入れ、願いが神に聞き届けられるようにと祈っていました。

親しくしていた高校生は「僕は宣教師になってアフリカに行きたいと願っています」と私に語り、また、ある女子高校生は、「このキャンプファイアでタバコをやめるように決心をせまられました。私はそう決心し、これを神が支えてくださるよう祈りました」と話してくれました。

あれから60年以上の時が過ぎました。

先日、私の孫娘のカバンの中からタバコの箱が見つかったことで、母親は「びっくりしたけど、娘と二人でタバコをやめることについてあれこれ話し合った」といったのですが、その瞬間、ロングアイランドのキャンプ場での場面が、一気に甦ったのです。

さて、もう一つの忘れられない思い出です。1978年、ケンタッキー州ヘンダーソン市で、ラッシュさんという方のお宅に2日間泊めていただいた時のことです。

朝夕は特に冷える季節で、暖炉に薪をくべながらいろいろと語り合っていたときのことです。ラッシュさんが私に、

「ショー（昭一のニックネーム）、君はドイツ語がわかるかね」と聞くので「少しだけ…」と答えると、

「私の息子がドイツに進駐していたときにその娘さんと結婚してね、その嫁さんがもってきた十字架がこれなんだが、君にあげよう」

と言うと、彼は暖炉の火に十字架をかざして、「ケンタッキーの思い出に…」と、小さな十字架を私に手渡してくれました。

人間の願いや思いは、燃える炎のことで、神や、相手の心の奥に、さらに深く届くのでしょうか。

ステイもしました。このジャンボリーの体験が外交官試験を受けようと思うきっかけになったのかもしれませんが。

——スカウティングの経験は、その後の外交官としての生活に役立ったのでしょうか。

**久米** 外交というのは、自分で何から何まで決めて進めるものではありません。刻々と変化する国際環境に的確に対応すること、外から飛んでくる弾をどう処理するかという場面が多いのです。とうていマニュアルどおりにはいきません。臨機応変さが必要なのです。その点、スカウトの野外生活と共通したところがある。とにかく何が起きるか分からないが、それに対応しなければいけない、という点です。とくに在外公館勤務では、そういう場面が多くあります。大使館には、ありとあらゆる種類の問題が持ち込まれてきます。

——グローバル化が進む中で、今の日本のボーイスカウト運動も国際化を迫られています。元外交官として、どうぞ覧になりますか。

**久米** 日本全体に内向き志向なところがありますね。ボーイスカウトも同じです。去年ブラジルで開かれた世界会議に初めて行ってみて、世界のスカウティングがどういう方向に向かっているのか分かりました。しかし、国内ではそれがあまり浸透していません。世界スカウト会議やジャンボリーなどを通じて、世界では貧困の問題とかアフリカの飢餓、平和、環境問題といったことに焦点を当てた取り組みをやっています。国内でもそうした意識を目覚めさせようとしているのですが、なかなか浸透しない。キャンプだけやればいい、という感じがまだあります。

——日本全体のムードが内向きだということですか。

**久米** 外交官の時も感じましたが、日本という国は国際的に活動している人が「特殊な一部の人」になってしまうケースが少なくありません。いわゆる国内派とのギャップが大きい。日本のスカウト運動にも同じようなことがいえると思います。世界ジャンボリーなど国際交流の場に出て行くスカウト関係者を増やして、そのギャップを埋めていくことが大事です。

国際に携わる人が一部の人になってしまう理由に「言葉」があるのかもしれませんが。しかし、国際交流は言葉を使わなくても心と心は通じ合う部分がかかなりある。日本人は完璧

主義なので、文法が間違っているのではないかと、などとすぐ考えてしまう。中学から英語を学んでいるので、実は、知識としては、かなりもっているのです。海外では、そんなことは気にしません。デタラメな英語でも、平気で使っている人がたくさんいるのが国際社会の現状です。自分の言いたいことをためらわずに発信しようとするれば、言葉はある程度、後からついて来るものです。それが、外交の第一歩です。

——どうしたらスカウティングの輪を広げていくことができるとお考えですか。

**久米** 私が育成会をやっている豊島第1団を見ていると、一度、入団した人たちはボーイスカウトの良さがある程度、理解してくれている。魅力がないわけではないのです。それを他の人たちにも、どうアピールして勧誘していくかでしょう。

——団発足の頃のようなお母さんの力でしょうか。

**久米** お母さんをつかまえることが、団員を増やすことにつながるの、今も変わりません。

最近のお母さんを見ていると、目に見える効用がないとなかなか乗ってきません。塾に行っていない学校に入るとか、部活動をやって大会に出るとか、成果が分かりやすい方に流れる。ボーイスカウトをやって何がメリットか。まずは、お母さんたちに、ボーイスカウトに入るとこんな効用がある、ということをアピールすることが大事です。グローバル化への対応が不可欠だというふうに、世の中のムードが高まっている昨今ですから、スカウト運動の国際性などをもっとアピールしていくべきだと思います。



聞き手／磯山 友幸

経済ジャーナリスト。1962年生まれ。日本経済新聞社でチューリッヒ支局長などを務めて2011年3月末独立。日本連盟広報委員。富士スカウト。